

■ ソケット式当て金「RT」

ものづくりが好きで熱中するまま、気がつけば古希も目前。未だに相変わらず子供のように「工作」している自分に呆れながら、助けてくれる皆さんに只々感謝です。

「金属造形展」

10月11日から15日まで2年ぶりの「金属造形展」を開催しました。

ご来場の皆様、ありがとうございました。

今回も多くの方にご覧いただき、金属による造形の多様さを楽しんでいただきました。



この展覧会は様々な金属表現をする作り手の「金属造形の会」という集まりの主催です。

アクセサリーのような小品からテントのフレームという構造体まで、また、伝統工芸から現代彫刻やオブジェまで、金属という素材を共有する24名の作品群です。目録としての出品数は75点ですが、実数は大小合わせて200点近い展示でした。



好評をいただいたものの、鍛金の絞り技法による作品の少ないことが気になります。

とても地味な作業をひたすら繰り返すという方法で、元々その方法で制作する人は少ないのですが、近年では職人さんも減少しています。産業構造の変化の中で腕が良くても仕事が無くなるので生きていくことができません。実際は仕事が無くなるのではなくロボットに移行していくからですが、その流れは誰にも止められません。他の分野でも地味な作業を要する職人さんは人口が減少しています。そういう時代の中で辛うじて技が伝えられるのは作品としての工芸や彫刻、あるいは特殊な造形物に限られていくと思われます。

しかし、それらは産業的製品ではなく、経済効果は期待困難かむしろマイナスな事の方が多く、文化として理解しなくては続かない領域です。いわば美術作品と同じ運命と思います。

そのためにも理解者を得るための活動の一つとして展覧会を開いています。わずかずつではありますが、理解者・支援者が増えて来ていることを感謝しています。



野依克彦作「鍛柿紋象嵌香炉」



志水ゆめか作「旅へ」

私の道具「ソケット式 当て金」

その展覧会の出品物として近年の私は道具も出品しています。自分の開発した「RT」と名付けた道具ですが、鍛金の絞り技法に使う「当て金」という金床を改良しているものです。

その「当て金」という道具を必要とする人口はとて少ないので、多くの人に役立つ道具ではありません。それでもそこから生まれるものが多くの人を喜ばせてくれる可能性はありますので、改良を続けています。

元はと言えば自分のために考えはじめたものです。

でも、自分のように苦勞している人は少なくないだろうと思われ公開に至りました。



鍛金でものを作る場合、デザインごとに「当て金」が必要になりますので、かなりの数が必要になります。

古くからの工房ではその定番製品を作るための「当て金」が揃えられ、中にはその種類の豊富さを工房紹介画像の背景にしている例も見られるように、とても重要な道具なのです。

大学などの教育機関では課題をこなすための種類の道具が人数分揃えられているのが普通なので、かなり大量の道具があります。それでもオリジナルのデザインの作品を作るとなるとそれに見合った「当て金」を作りながら作品を作る、ということになります。

金型を作るほどの大変さではないけれど、作品を作る前に道具作りだけで疲れてしまうということも稀ではありません。

さらに、学校を出ると自分の道具だけしかありませんから、当分は「当て金」を作りながら作品を作る、ということになります。

当初は私自身も道具をわずかししか持っていなかったのに、自分用の「当て金」を作りながら作品を作る、ということをしていました。しかし、新しい物を作る度に前作業がたいへんなので何とかしないと続けられないな、と思いながら制作していました。

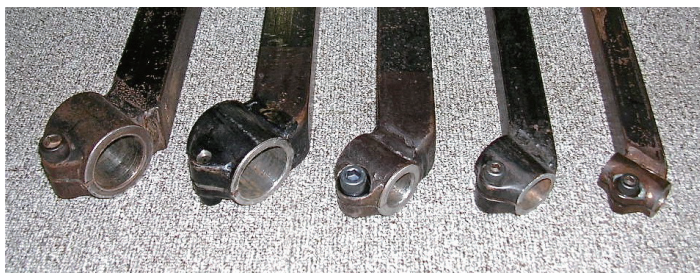
世の中の道具の多くはその需要に応えながら改良され進化してきましたが、鍛金の道具は需要が少なく、改良や量産の必要に迫られることも少なかったのでしょう。

機能部分と支持部分を分けて組み合わせれば、少しの道具が様々な働きをする、ということはわかっていたのですが、望ましい構造を確定するには随分迷いました。実際に作って使う中から改良することにし、さっそく試作をし、試用してみました。



従来の「当て金」の当て面部と支持部を別にし、丸軸とそれを受けるソケットによって組み合わせる構造にしました。それによって新しい形状に対応する場合も、当て面部品を変更するだけでほぼ可能となりました。また、その構造によって欧州などで使われる角軸式の道具よりはるかに多様な機能を持たせることができ、予想通り様々なシーンで有効なことを確認できました。

問題は繰り返し強い打撃を受ける道具としての強度の確保や快適性など、従来の「当て金」より優れた道具として造りたいと考え、様々な仕様の試作品を作りながら改良していました。



その頃は自分の制作と教室で制作する生徒さんの他、身近な後輩たちに使ってもらい、感想や意見をもらいながら改良していました。

また、愛知教育大学や愛知県立芸術大学のお招きにより授業をさせていただきましたので、その中で実際に学生たちにも使わせることで様々な状況に対応できることを確認できました。

「RT」としての始まり

開発当初は、「ソケット式 当て金」と呼んでいましたが、10年ほど前、名古屋造形短期大学の坪井勝人先生より道具の採用のお話をいただきました。とても嬉しい話ですが、まだ自家製のみで販売できる製品としては作っていませんでした。ご縁のあるクロダイト工業株式会社にダクティル鋳鉄製の信頼できる製品として製作していただくことを決意しました。ダクティル鋳鉄製の道具はとても快適で、まず「基本型」1種類のみでしたが、これが「RT」としての始まりでした。

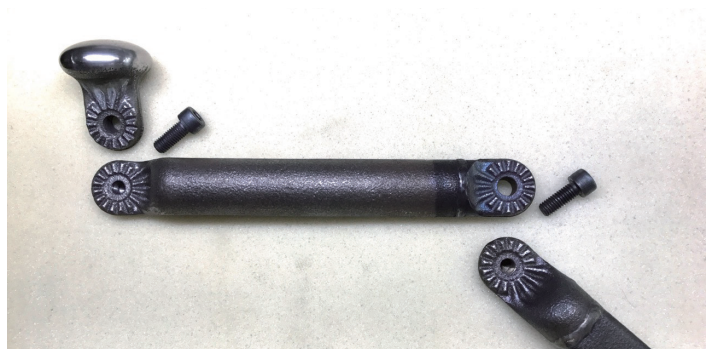
その造形大の授業でも様々な試作品も交え、学生たちのデザインの実現をサポートしながらより良い状況の検討もできました。2009年にはWeb上にも公開しました。現在は名古屋芸術大学でも授業をさせていただき、同様に学生の創作に対応しています。

かつてCDAの事業として「鍛金体験講座」を開いていただきましたので、参加いただいた方には概要をわかっていることと思います。



その後、他の種類も製作し、現在の構成に至っていますが、さらに有効な道具とするため新しい方向の自由度を持たせた物を開発中です。

ギアを使う方法なのでギア式当て金「RTG」と名付けて試作品を展示発表しました。



これらの道具を使うことで、従来の当て金よりはるかに少ない道具で様々なことが出来ます。故に「鍛金」をする人の負担を軽減できますので、少しでも続ける人が増えることを願っています。かつて「鍛金」を学んで関心を持った学生も、設備や道具の問題で諦める例が多かったのですが、この道具によって続ける人が少しずつ増えているのが嬉しいです。

「鍛金」は時代遅れの技ではありますが、その技法の好きな私としては消えないで欲しいと願っています。